

開発における埋蔵文化財等の保存について

近畿圏整備本部 高野 浩二

私は開発者の一人として、上記のテーマに関し、開発者に対して次のようにお願いしたい。なお本文において、開発者とは主として開発の立場にある人を、保護者とは主として文化財保護の立場にある人を、一般人とはそのいずれにも属さない人をさすものとあらかじめ定義する。

人類がこの地球上に姿を現わしたのは、洪積世の第一間水期、今から60万年ほど前であるという。その頃と現代との文明の差の大きいことは今更いうまでもない。しかしよく考えてみると、一方、その居住地というものは、この広い地球表面の中の、陸地、しかも平地または丘陵地などのごく限られた範囲に過ぎなかった。ここに数万世代、今や数十億の人類が生きていることは、新しい生活環境を作り出すための、また、古い環境をより快適な環境にするための、開発、再開発、再々開発が繰返されたことを、そして今後も繰返さねばならないことを明確に物語っているといえよう。千三百年前、平城京の大都市計画事業のため、いくつかの上代の遺跡が取り除かれ、姫路城の石垣には、附近の古墳の石室の材料だったと考えられる石も多い。未開地ではもはや生きられないほどひ弱になった我々文明人に、何等かの開発は今や不可欠であると考えねばなるまい。

一方、歴史環境の大切な部分を占めている文化遺産は、我々の社会の実態を把握し、我々が

未来を如何に生きて行くべきかを導き出すための根本資料であり、その保存の重要性については、今更説明を要しないものと思う。

我国の国土面積は約37万Km²、その内深山幽谷を除いたいわゆる開発可能面積は15万Km²程度であろう。これに対し埋蔵文化遺産は、今や全国に40万ヶ所にも及ぶと推定されており、社会の発展がことに早かった西日本一帯は、とりわけその密度も高く、大型開発がこういった埋蔵文化財を完全に避けることは不可能に近いといえよう。

開発者は、その存在が明確な埋蔵文化財は、もとより計画面において極力避け、工事等の段階で不時発見した場合には、施工と併行して調査を行い、記録保存し、また可能な限り構造等の一部修正をするなど、その保存については細心の注意を払いつゝ開発を進めている。しかしながら、開発の理念と、保存の理念との間には完全に調和しないものが本来存在するかのようで、ようやく妥協点を見出す程度の結果におわることが通常であり、開発者としてもまことに遺憾に思っている次第である。

行政が最大多数の最大幸福を求めることを原則とするなら、この保存と開発との正しい接点も、その原点に立って一般人に求めてもらうのが正しいかも知れない。しかし、一般人がこの

生産と技術

種問題の本質についてどれほど理解しているかは大変疑わしいものがある。道路の建設が遺跡の一部を破壊する、と聞いた場合、「かけがえない祖先の遺産を守れ！ 道路建設反対！」と叫んだ人も、自分の家を建築の途中、小さな自分の土地に文化財が埋蔵されていたと気付いた時、どんな処置をとるだろうか？ 自分の土地が史跡などに指定されて規制を受けた場合、どのように感じるだろうか？ 彩色壁画が発見されれば、中は見られなくても高松塚に延々長蛇の列。清流飛鳥川はゴミに埋まり、謎の石は釘でこすった落書だらけ。勿論、良識ある人も多いとは思いますが、その比率は小さなもののように感じられる。

このような情勢のもとにおいて、開発者は如何にあるべきであろうか。開発者と保護者との間の大きな溝をどうするのか。答はたゞ一つ、存在する溝は埋めねばならない、越えねばならない。ではどちらが越えるのか。私は是非とも開発者側が溝を越えて保護者に接近してほしいと願うものである。溝を越えること、それは開発者が保護を完全に理解すること、保護の理念を熟知することではないだろうか。

軟弱な地盤の上に構造物を築造しようとする開発者は、その地盤の改良工法の研究に全力を傾けるだろう。何故、埋蔵文化財の上に構造物を築造するのに文化財のことを研究しないのだろう。それは他人の分野といふ切れるのだろう

か。保護者の分野だとうそぶいていていゝのだろうか。

最近“発想の転換”という言葉がよく使われるが、まことに大切なことで、既存の概念をまず離れることは、より正しく事象を把握し、解決に導くために不可欠である。しかしその“発想の転換”は誰にでもできるだろうか。勿論可能である。たゞし、その人、各人の素養の範囲によって、転換の可能限界というものがある筈である。だから開発者は、あらゆる方面の知識を吸収するための努力を常に忘れないでほしいものである。

保存と開発との調和の原点は、まず計画段階にあるが、その根本となる総合計画や都市計画を作成するのは開発者である。保存の素養のない開発者により計画ができる筈がない。というと同時に、保存と開発との調和の原点は開発者が既に行っていることを強調したい。

開発者は、自らの努力によって、自らの素養を深め、能力を高め、そのうえで、開発者が真の“開発と保存の調和”の策を提案し、実現して行く。このことは一見大変迂遠なようではあるが、これだけがこの問題を本質的に解決する唯一の道であると、かたく信ずるものである。

最後に私達開発者の合言葉を唱えたい。

“開発と保存の調和”
“それは我々開発者の手でなしとげよう”